

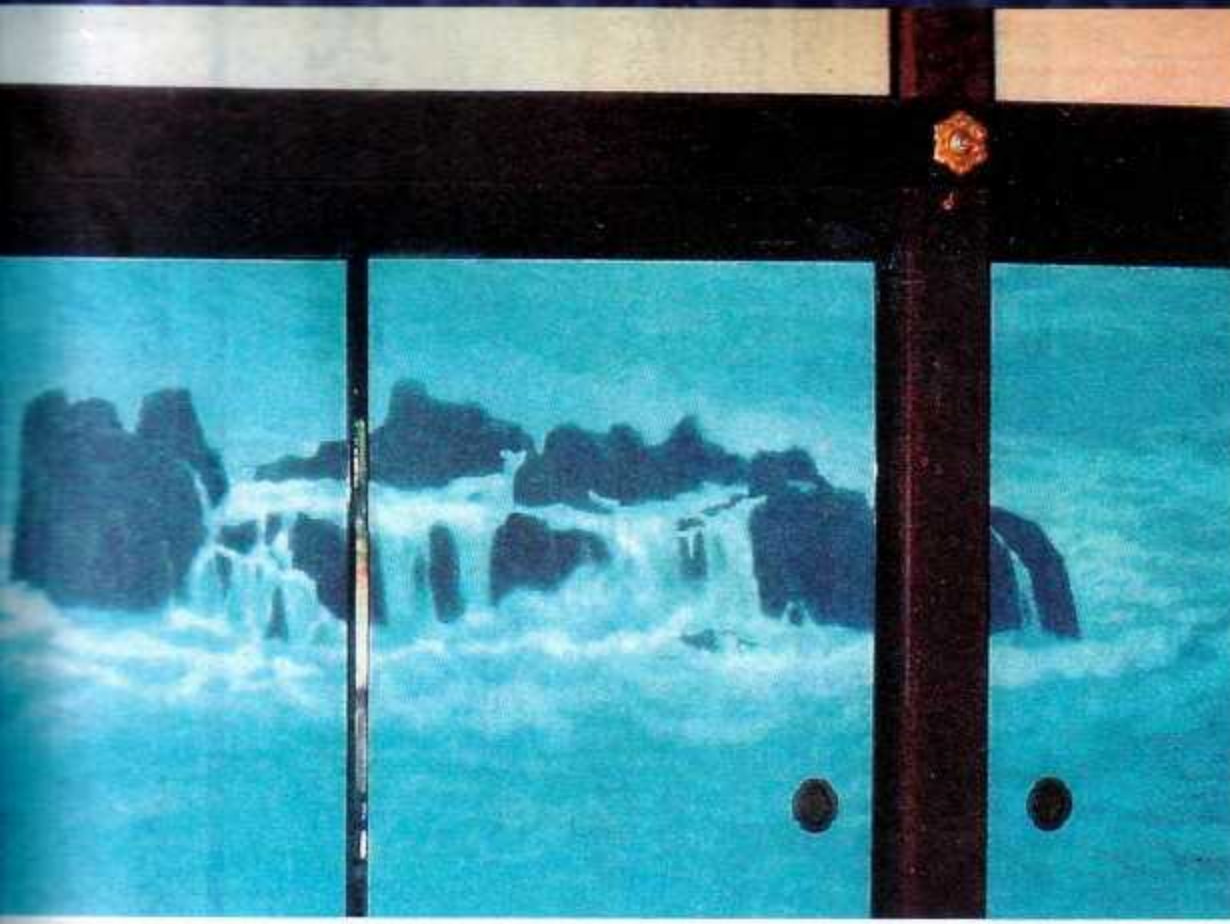
# 東山魁夷作 唐招提寺の障壁画

# 曾々木海岸がモデル

昭和を代表する日本画家東山魁夷が描いた唐招提寺（奈良市）御影堂の障壁画「濤声」は、輪島市の曾々木海岸がモデルだったことが、長野県信濃美術館東山魁夷館（長野市）の調査で分かった。奈良時代に5度に及ぶ渡海の失敗を乗り越え、同寺を創建した唐の高僧鑑真の不屈の生涯を連想させる障壁画の構図とほぼ同じ岩が曾々木に現存する。生前に「濤声のイメージにふさわしい地は能登」と語った東山が、代表作の着想を得た地が初めて特定された。

## 長野の美術館調査

左右反転で描く  
障壁画は1971（昭和46）年から11年かけて制作された連作の一つで、「濤声」は国宝「鑑真和上坐像」が安置される御影堂内にある。その中央の襖に描かれた岩が、曾々木で「おまの岩」と呼ばれる岩を左右反転させた姿と、ほぼ一致する



## 表す生涯の不屈の鑑真の現存岩の



唐招提寺御影堂  
—奈良市

唐招提寺御影堂障壁画  
東山魁夷が1971（昭和46）年から82年にかけて、唐招提寺を創建した鑑真にささげるため、厨子の扉絵と合わせて制作した。日本の風土を題材にした「濤声」「山雲」や、中国の広大な風景を描いた「揚州薫風」などからなる。御影堂は現在、平成大修理事業で拝観できない。  
東山魁夷（1908〜99）  
横浜市生まれの日本画家。日本芸術院会員で日展理事長を務めた。69年に文化勲章を受章。皇居新宮殿の壁画も手掛けた。所蔵していた自作は長野県に寄贈した。

ことが分かった。  
おまの岩は、中央がテーブル状の幅約30cmの岩で、冬場は高波が打ち付け、地元では荒々しい日本海を象徴する光景となっている。

曾々木出身で京都府城陽市在住の堀井正行さん（68）が「唐招提寺の障壁画と構図が似ている」と気付いたのが調査の発端となった。東山の代表作のきっかけの地として曾々木を発信できなしかと考えた堀井さんが、寺の許可を得て障壁画の写真を撮影。2015年、千葉県市川市の東山家に手紙で照会し、東山家は東山魁夷館に調査を依頼した。

調査した東山魁夷館元学芸係長で、長野県文化振興事業団の伊藤羊子学芸員によると、東山作品には必ず基となる取材地が存在する。東山は唐招提寺の障

「全体の構図を考えて岩の左側を強調したかったことや、モデルとなった岩の特定を避けるためだったことが考えられる」と推察した。開山忌など御影開帳時には、岩の右側の襖が開くため、岩塊を御影から遠ざける配慮をした可能性もあるという。

### 住民有志が協力

調査には曾々木に住む堀井さんの兄利治さん（70）ら地元有志が協力した。曾々木区や曾々木観光協会は、地域活性化に活用できないか検討している。ただ、おまの岩は、江戸時代に「能登の親不知」と例えられた難所「八世乃洞門」付近の沖合にあり、一帯は立ち入りが禁止されている。

二俣光男区長（68）は「おまの岩は地元では有名なが、東